

注意とリズム

伊集院 令子*

Attention and Rhythm

IJUIN Reiko

abstract

This article deals with Husserl's analysis of attention at the winter semester 1904/05 from the point of view of the genetic phenomenology. In Husserl, the concept of attention covers a wide range of phenomena. This concept not only covers the concept of concentration, but also covers that of interest. This paper reveals that Husserl's analysis has double character; on the one side this text lies under the context of the development toward the transcendental phenomenology. On the other side this text has many germs of genetic phenomenology. The aim of this paper is the attempt to apply this analysis to the genetic phenomenology of picture-consciousness (Bildbewusstsein). The key to clarify the mystery of the genesis of picture-consciousness is to illuminate the relation between picture-consciousness and rhythm. In this article, I explain why many modern artists have still today never abandoned the method of drawing, from the point of view of the role of rhythm in picture-consciousness.

Key words ; picture-consciousness (Bildbewusstsein), Husserliana Bd.XXVIII, genetic phenomenology, rhythm, modern art

カンディンスキーは絵画を音楽のようにしたいと夢見た。カンヴァス上から、モチーフを、もののかたちを完全に消去し、色彩の強烈な対比によって、直裁に、絵画面に律動と拍動を与えようとした。リズムはしかし、形象の完全溶解によってのみ、純粹に実現されるべきものなのであろうか。別の行き方はないのだろうか—

2005年に、フッサール全集第38巻『知覚と注意』が公刊された⁽¹⁾。この巻には、1904/05年冬学期講義前半(序論、第一、二部)の知覚と注意に関する講義草稿が主要テキスト [=Nr.1]として収録されている。この収録は今日のフッサール研究にとって二つの大きな意義をもつ。一つは、1904/05年冬学期講義は、1907年『物と空間』講義⁽²⁾とともに、『論理学研究』の補完を意図した研究構想の下にあるが、この公刊により、ようやくこの構想の全貌が明らかになる時機が訪れたのである。『論理学研究』の補完構想は、『論理学研究』(1900/01)から『イデー I』(1913)へのフッサール現象学の生成現場のドキュメンタリーである。しかしそれ以上に、わたしはこの集中模索の草稿群の中に、『イデー I』期にはむしろ背後に隠れて目立たなかった後の発生的現象学の萌芽、さらには未だ発芽に至らない種子を見いだし得ることを強調したい。二つには、この公刊は像理論の進展に役立つということである。当該の1904/05年『冬学期講義』の前半部分は、フッサール像意識分析の内容的に充実したテキストを含む同講義第三部「想像と像意識」と一続きの、それに先立つ部分である。そのことから、フッサール像意識分析における不明確な点を、その前半部の記述を踏まえて再検討する道が拓かれるのである。以上の

キーワード：像意識、フッサール全集第38巻、発生的現象学、リズム、現代芸術

*人間文化研究所研究員

二つ、すなわち、フッサール現象学全般の展開過程理解の促進とフッサール像理論研究の深化のために有益であるという意味で、第38巻の公刊はまさに待望の公刊である。

本稿の考察の軸足は、後者（像理論研究）にある。本稿の狙いは、フッサール像理論の展開可能性の追求としての像の発生的現象学⁽³⁾の構築のための直接的な手掛かりを、『注意講義』のうちに発掘することにある。像意識の発生的現象学については、既にいろいろな機会に論じているので重複を避け、主題と方法のみを定式化する。像の発生的現象学の主題は、像意識の本質固有性を支える像性の現象学的発生起源を遡行的に解明することである。フッサールの諸記述の内的連関の解明により像意識分析と緊密な関係をもつ記述を発掘し、発生的現象学の文脈に適切な仕方でも移動するという方法をとる。フッサール自身は像意識の発生的現象学を試みていないために、このような文脈移動が方法論的に要請される（本稿三でその一端を示す）。

一 『注意講義』の概略とその特徴

本節は『注意講義』における注意概念を講義の脈絡に即して検討する。

始めに、テキストの位置づけをはっきりさせるために、『論理学研究』の補完構想について一言説明する。『論理学研究』の補完構想とは、「比較的高次の知的諸作用」(3)のみに照準を合わせた判断論を扱った『論理学研究』第2巻の研究を、「端的な最も低い次元の知的諸作用」(3)によって補うという計画である。この研究計画の主要考察対象は、「知覚、想像、像意識、想起、そして時間意識」(vgl.4,7)である。これらは、知覚と「近親な」(7)諸体験（想像、想起、像意識）と、時間意識の問題系に大別される。知覚分析のテキストは、1904/05年冬学期講義第一部「知覚について」と、第二部「注意、特別な思念について」(=『注意講義』、以下この第二部を『注意講義』と命名する)、そして1907年『物と空間』講義である。知覚と親近な諸体験分析テキストは1904/05年冬学期講義第三部「想像と像意識」である。時間意識の分析の主要テキストは同講義第四部である。予め押さえておきたいことは、『論理学研究』の補完研究の考察課題である、低次の直観的諸意識は、後の発生的現象学において遡行的考察の中心場面となる意識層に他ならないということである。

『注意講義』の議論の大筋は次のようである。

講義の冒頭、「統握 (Auffassung) 思念 (Meinung) と性質 (Qualität) との諸関係」についての問いが提出される (vgl.68,73)。全体知覚と部分知覚との関係の問題を念頭に置きつつ⁽⁴⁾、この問いは、順次、「思念と統握との関係の問い」(68-72,79-81)「思念と性質との関係の問い」(81)という仕方でも問われていく。思念とは、「厳密な意味での意図作用 intendieren」(68)である。『注意講義』で論じられる思念は、外的事物知覚を中心とした「強調する関心」(68,vgl.101)という理論的関心が支配的な思念である。思念と注意 (Aufmerksamkeit) との関係性が、日常的言語の面から指摘される (vgl.73)。他方、統握は、対象を統一的に把握し、表象を成立させる働きのことである。まず、両者の関係については、統握なしには思念はあり得ない (vgl.72,79,81) こと、「思念は単なる統握を越えていく」(vgl.68) こと、思念は統握よりも「高次の機能」(81)であるということが指摘される。これらから、フッサールがここで、思念と統握との関係を、統握が思念を非独立的に基づける関係 (vgl.XIX/1, 267ff) として理解しようとしていることが分かる。次に、思念と性質との関係についてであるが、性質とは、対象が確実に、疑わしく存在するなどの信念性格のことである。思念作用なしには信念・不信念は考えられない (vgl.81) として、両者の密接な連関が指摘される。両者の区別の考察の中で、対象が「注目された (気づかれた) / 注目されない (気づかれない) bemerkt/unbemerkt 領域の区別」(82) が導入される。ここまでの前半の諸考察である。この区別の導入を契機に、後半の注意についての諸考察が始まる。注目された領域 / 注目されない領域という対立が、統握可能性へも適用される (vgl.91) 包括的な意識区別であることが、意識の明瞭性の諸段階の区別化を通して解明されていく。一次的注目作用 (強い意味の気づくこと、=注意、思念) と二次的注目作用 (曖昧に漠然と気づくこと) との区別が、「相対的区別」(100) として規定される。この区別に関連して、注意には「傾向的習慣性」(102) という側面があることが指摘される。その結果、注意は、関心としての注意として、「関心」(Interesse) 概念の下に追求されることになる。これは、フッサールが、注意現象を、その都度の一回ごとのスポットライト機能としての通常の語義の範囲内の「注意」だけでなく、意識連関を貫いて生起する継続する現象としての注意現象に光をあてたということの意味する。フッサールは、注意に関心と捉え直すこと自体には十分な説明を与えていな

い。しかし、ここでの関心は、漠然とした興味、心の萌しを含めた広い意味での持続的な関心を背景とする心の律動のことである。フッサールは、注意現象の成立に不可欠な契機としてこうした「関心」を見いだしたのである。フッサールによれば、「その統一性のうちに緊張と弛緩の一つの多様体が融合した驚くべき複雑化した作用」(104)として、関心の根底にある感情状態独特のリズム(Rhythmus)についての洞察が導かれる。すなわち、「緊張(志向)と弛緩(充実)の状態」(104,vgl.107)というリズムにおける感情は、関心の「本来的発動機」(108)であるということと、境界づけ(abgrenzend)機能をもつこうした関心(理論関心)自体がふたたび「認識過程の発動機」(112,vgl.118)、「注目作用を促す力」(108)であるという事態が記述される。後半の注意の諸考察のまとめとして、包括的な注意概念の下に、「関心としての注意」と「思念としての注意」という二つの規定が提出される(114ff)。最後に、冒頭の問いに戻り、思念、統握、性質がそれぞれ異なることが確認され(112f)、講義は締めくくられる。

以上のように、『注意講義』の構成は錯綜しており、議論自体にも荒いところがある。前半の諸考察は、「思念とは何か」という問いに集約できる。後半の諸考察は、明瞭性の段階の諸区別の細分化と関心概念の精査が中心である。注目作用(気づきの作用 Bemerken)と思念(Meinen)との関係が不明確なために、一見、前半(思念分析)と、後半(注意分析)との間に断絶があるように感じられる。しかし、この講義では、両者(Bemerken, Meinen)はほぼ同義的に扱われているので、一次的注目作用(=能動的な注意)と二次的注目作用(=不明瞭な気づき)という区別」と、思念における「境界づける・境界づけない(思念作用)という区別」とは、実は同じ事態を言い表しているのであると、このように理解することで、この隔たりは埋めることができる。『注意講義』の末尾近くに提出された、上掲の注意概念の二つの規定(関心- / 思念としての注意)も、この読解の方向を跡づける。

内容的に注目すべき点は、思念と関心というフッサールの他のテキストでは一部を除きあまり区別されない⁽⁵⁾ 両概念が、包括的な注意概念の下位概念として明確に区別されていることと、その上で、関心が習慣的傾向性、感情状態、能力として捉えられているということである。ここから、フッサールが、意志作用等に「親近な」自発的、能動的な作用である思念と、この思念にきっかけを与え、その活動を促進する感情状態としての関心との間に、動機づけるもの(関心)と動機づけられるもの(思念)という一種の「動機づけシステム」(vgl.I,109)を見てとっていることが理解できる。関心が、認識作用の出発点にある事物知覚を発効させ、その進行を「関心の統一性」(109)の下に制御するものが関心のリズムであり、リズムにおける喜びとしての感情状態(あるいは習慣的傾向性)であるとフッサールは記述する。つまり、客観化作用に基づけられることで、より高次の非客観化作用(例えば、美的に気にいる作用など)が成立するという理解図式(vgl.III,1, § 120)における感情作用の位置づけとは異なる次元の感情が、ここでは問題となっているわけである。発生的現象学が試みられるのは1920年頃であり、『注意講義』には、発生的現象学的区別、諸概念等は登場しない。しかし、この「発動機」という感情の働きは、触発の成立にかかわる受動的総合の機能に通じるものである。関心のリズムに乗りながら、関心の交代につれて、気づかれた領域と気づかれない領域が様々に入れ替わるという事態は、反省により遡れる意識の際の出来事である。『注意講義』において、フッサールは、志向とその充実化という認識過程(志向性)の最も基本的枠組みを、関心における緊張(志向)と関心が満たされることによる弛緩(充実)とのリズム、気づきにおける快として記述している。このように志向性の骨格を感情状態性の面から捉えることによって、図らずもフッサールは、認識過程の動機づけ関係の遡行的考察という発生的現象学的分析に踏み込んでいるといえる。何かを何かとして見るという認識プロセスを促し、リードするこうした快感情は、漠然とした衝動の充足へ向かう運動に他ならない。従って、この関心概念は、理論的態度を根本的とする表象作用を基軸とする狭義の志向性の枠組みを超えるものである。この概念は、むしろ、狭義の志向性の根底において機能する志向性、すなわち、後年の「衝動志向性」(vgl. XV,Nr.34) 概念にふさわしい内実を備えているといえる。

だがしかし、関心のリズムが気づきにおける快であるという洞察に至った時点で、フッサールは、いささか唐突に追求を止めている。注意の背景としての境界づけられていない領域は、「夢を失った眠り」(121)、「いわゆる無意識、気を失った状態」(121)であり、これ以上の立ち入りは現象学の仕事ではないとする。無意識に関する現象学的記述は、現象学の境界設定の作業以外にはありえないとする、厳格な自己規制が『注意講義』でも働いているのである⁽⁶⁾。

こうした制約にもかかわらず、『注意講義』における、関心と思念との関係、および、関心における緊張と弛

緩のリズムについての洞察は、『イデー I』に代表される中期の超越論的現象学よりも、意識の低い段階における身体機能と知覚との緊密性に迫っている点で、後期の『受動的総合の分析』や『イデー II』第一篇第三部等の発生的現象学的知覚論と連なる、上に見たような独自の内容をもつものである。次節では、このことを『論理学研究』『イデー I』との比較考察という見地から、詳しく検討する。

二 『論理学研究』および『イデー I』との比較

本節では、前節で検討した『注意講義』の注意概念を、『論理学研究』第 19 節および『イデー I』第 88 節における注意概念と比較考察する。『注意講義』は、『論理学研究』の補完構想の下にあるために『論理学研究』から『イデー I』への途上性格をもったテキストであるという位置づけが適切かどうかを吟味する。この吟味を通して、「関心におけるリズム」の重要性を際立たせることが本節の狙いである。

『論理学研究』第五研究第 19 節では、表現作用における注意の機能が分析される。表現作用（通常の意味での表現作用）は、文字記号における狭義の表現作用（インクの染みなどの物理的客観現出作用）と記号に意味を与える作用との融合としての複合作用である。この複合作用における注意の向かう対象について、フッサールは、通常の表現作用の場合、我々の関心は「物理的客観にではなくむしろ意味付与作用のうちに生きている」(XIX/1,423 [下線は筆者による])と指摘し、注意とは対象に特に意識的に配意する (zuwenden) 働き、「際立たせる (auszeichnend) 機能」(XIX/1,423) であると規定する。この記述から窺える「注意すること = 作用のうちに生きること」という理解は、第二版の加筆において、作用の「遂行様態 (Vollzugsmodi)」(vgl. XIX/1,423,435) として明瞭に把握されるようになる。

『論理学研究』第 19 節の注意分析の特徴を整理すると、注意が表現活動という比較的能動性の高い理論的認識活動において考察されていること、注意とは作用に没頭し作用の中に生きること (= 遂行様態) であるとされること、注意と関心とは区別されていないこと、となる。

『論理学研究』と『注意講義』との注意分析はどのような関係にあるだろうか。たった今確認したような、作用に没頭し作用の中に生きること (= 遂行様態) についての記述は『注意講義』には直接的には登場しない。しかし、前節で検討した明瞭性の諸区別の分析との間には次のような内容的つながりが確認できる。フッサールは『注意講義』において、思念 (= 注意) と関心との密接な関係を「関心の集中」のうちに見てとっている (vgl. 118)。このことから、作用に没頭して生きることを可能にし、そのように生きる経過を方向づけるものが、前節で検討した思念の発動機としての関心であり、関心におけるリズム、リズムにおける快であると読むことができるのである。もう少し詳しく言うと、『注意講義』では、思念 (対象に特別に配意する強い意味の注意作用) の中心機能は、意識対象性を境界づける機能であると規定される。思念のこの境界づけ機能は、統握に自立性を付与する性格でもある (116)。境界づけ機能は「意識の光」(121) に喩えられる。この光によって意識は、境界づけられた領域 (前景) とその背後の境界づけられない曖昧な領域 (背景、背景思念) とに区分される。明瞭な領域と曖昧な領域の区分は不変不動ではなく、知覚連関の経過において、思念の同一性を保ちながら、同一の知覚のままに、あの側面この側面へと関心の交代ごとに、前景と背景が相互に入れ替わる (107ff)。また、習慣としての注意は、関心の統一性の内部において、「つねに新たなものに注意を向けるようになる」(119)。関心の統一性が思念の同一性と思念の経過を導くわけである。『注意講義』は、ある作用への没頭が続き、止むのかということ決めるのは、思念と関心との間の連携関係であるということと、この連携関係がどのようなものであるかということを出したのである。

『注意講義』の分析は、考察場面を、表現作用から事物知覚というより低い直観的意識へと引き下げることで、意識領野の分節化機能をもつ注意と関心との絡み合いとして作用に没頭するという事態の把握において、『論理学研究』の分析を深化させたことが明らかになった。

次に『イデー I』との比較を行う。『イデー I』の注意分析 (第 92 節が中心) の特徴は、注意の変更を純粹自我の自由な眼差しの向けかえ (III,1,214) として規定したこと、ノエシス (志向的体験の主観的側面)・ノエマ (対象的側面) の相関関係という観点から、注意と性質との違いを図式的に明確化したこと、にある。『イデー I』は、注意現象を純粹自我から発射された注意の放射線が対象的なものへ向かう現象として捉えた (III,1,211ff)。純粹

自我とは、現象学的還元操作によって、純粹意識に随伴する意識作用の遂行者として、見出される契機である(vgl.III,1,123f.)。『イデーニ I』では、純粹自我の眼差しの向けかえは、自由な向けかえ、すなわち、自我の自発的能動的作用として明確に規定された。前節で検討した思念(注意)と性質との関係についても、性質の変動は、対象の意味に関わるが、注意の変動態は対象意味には影響を及ぼさないとし、両者の関係が、ノエシス・ノエマの観点から整理された。純粹自我の高次の機能である注意は、存在性格にかかわる信念性格である性質とは異なる「ある固有の次元」(III,1,211)の普遍的意識構造として確定された。

このように、『イデーニ I』は、純粹自我の自由な自発的機能としての注意概念、および、ノエシス・ノエマの志向的相関関係という観点からの図式的整理により、『注意講義』一特に前半の思念分析—を明確化し、注意機能の能動性という理解を先鋭化したといえることができる。

以上より、『注意講義』の注意分析が『論理学研究』から『イデーニ I』へのフッサール現象学展開の途上にあることが確認された。しかし、『注意講義』の分析の意義は、『イデーニ I』に代表される中期の超越論的現象学確立への集中模索の過程の記録に尽きるものではない。

当該第38巻の編者は、編者序の中で、『注意講義』とそれに先立つ知覚についての1904/05冬学期講義第一部と後年の諸講義との違いを三つ指摘している(XVIII)。一つにはこのテキストが現象学的方法を欠くこと、二つには自我の観点が欠如していること、三つにはキネステーズへの言及がないことである。欠如の指摘のみであることによって、上の特徴づけはテキストに対する否定的ニュアンスを帯びている。しかし、私にはテキストへのこの否定的評価を全面的に受け入れることは出来ない。

というのも、まず、第一点目については、現象学的還元の着想時(1905年頃)と『注意講義』との時期的重なりにおいても、たった今本節で確認した内容面から言っても、『注意講義』に現象学的還元の方法論が欠けていることは間違いない。その意味で編者の指摘は正しい。しかし、『注意講義』の具体的分析のどこが、現象学的還元という方法論の欠如に由来する問題点なのかを指摘することは、実はあまり容易なことではない。前節で確認したように、『注意講義』では、感情状態としての関心について綿密な分析が行われたにもかかわらず、フッサール自身それ以上の追求を止めたという点に限界を認めることができるかもしれない。しかし、これは、現象学的還元論の有無というよりも、発生的現象学的観点の有無の事柄である。しかも、『注意講義』が立ち至った、認識過程の発動機としての関心という、低い意識次元の直観的知的諸体験の根底に横たわる感情契機の働きは、例えば、『受動的総合的分析』第31節において、受動性の領域における色の際立ち現象の具体的あり方にはまだ十分踏み込むことができていないことが告げられているように(XI,148)、極めて困難な問題事象なのでこれ以上立ち入ることはできない。

二番目の、自我についても同様である。上でも確認したように、確かに『注意講義』には、純粹自我の観点が無い。しかし、『注意講義』の分析は、本質要素の点で「完全に空虚」(III,1,179)とされる純粹自我よりも、むしろ、「習慣性の基体」(I,100ff)としての自我という、後年『デカルト的省察』における自我の規定に対応する内実を備えている。関心の習慣性、および、訓練による習慣の克服(調整)可能性調節についての記述(81)は、感性的知覚における習慣性の基体としての自我が、どのように、習慣を獲得し、あるいは、習慣を欠落していくかについての現象学的発生的分析として貴重である。

第三点目については、考察対象の意図的分配という見方ができる。『注意講義』にはキネステーズ分析の視点が欠けているのではなく、同じ研究構想下にある、1907年『物と空間』講義の考察主題として予め当面の課題から意図的に除外したと思われる。『注意講義』に先立つ第一部「知覚について」第6節における側面概念の相対性の指摘(29)や、同第14節における知覚的明瞭性の限界点に関する具体例における「パースペクティブの短縮」(53)の分析は、キネステーズ分析を主題化した1907年『物と空間』講義と共通し、その要点を先取る内容となっている。さらにまた、上の段落で指摘した習慣性の調整可能性の記述は、目が動くにつれ関心が交代するという事物知覚における視線のさまよいが「訓練によってある程度克服可能」であるという指摘であるが、「訓練」を身体的自我の能力の更新と捉えれば、この指摘はキネステーズ(運動感覚)と知覚経過との連動についての記述として読解可能である。

『注意講義』が『論理学研究』から『イデーニ I』への途上性格をもつことは否定できない。しかし同時に、『注意講義』にはこの性格づけの枠に収まらない面もあることが、以上の考察から浮き彫りになった。フッサールのテキストに指摘されることの多い、プログラム性格と具体的分析との間のずれが『注意講義』においても確認されたわけである。ずれ、乖離は『注意講義』の場合、発生的現象学的分析の萌芽のうちに現れている。『注意講義』の関心分析は、端的な感性的事物知覚におけるより低い意識層（受容性や受動的志向性の諸層）において、感情的契機が認識過程の導き手として果たす役割を、リズムといううねりとして描き出した。このように『注意講義』は中期の超越論的現象学の生成現場であるとともに、後期の発生的現象学の萌芽を多く含む、生産的かつ多元的テキストであることが明らかになった。

三 リズムと像意識

本節では、『注意講義』に続く同冬学期講義第三篇中の、美的像観照に関する記述を、『注意講義』の関心概念の見地から再検討することを手掛かりにして、像意識とリズムとの関係を考える。本節の目的は、前節までの考察成果が、像の発生的現象学の構築にどのように役立つかの道筋を描くことにある。

予備的確認として、フッサールの像概念の基本的特徴をまとめる。

像意識とは、何か（主題）を像において眺める直観的意識である。像意識においては、物理的像（das physisches Bild カンヴァス、絵の具のしみ）と模像機能をもつ像客観（Bildobjekt 絵画、写真等）と像客観によって模像される像主題（Bildsujet）（子供の写真の子供）という三つの対象性区分がある。像客観をめぐる、物理的像、像主題との間に「二重の意味における一つの相克（Widerstreit）」（XXIII,51）が成り立つ。意識の側では、諸統握の相互浸透と相克（XXIII, 82）が対応している。像意識の基本的構造は、「像意識という統一的意識の中では、三つの対象性区分をもつ諸統握が相互浸透する」（三層構造）と定式化できる⁽⁷⁾。

フッサールは美的像観照（die ästhetische Betrachtung）について次のように記している。

「関心は絶えず像客観に還り、そして像化の仕方に享受を見いだしつつ、関心は像客観に内的にかかっている」（XXIII,37 [下線は筆者]）。

この箇所は、美的像観照（＝美的像意識）と、通常の想像表象および想起表象との比較という文脈にある。美的経験と芸術経験を区別せずに、両者の基本的特徴を、現象学的還元操作に親近な、自由な態度変更のうちに見いだすフッサールの基本的考えに照らして、さしあたり、この箇所は次のように読める。模像機能が中心となる像意識の場合、われわれの関心は、何が描かれているか、写真の被写体は何か（Was）など、もっぱら（像）主題に向かう。これに対して、美的観照体験の特徴は、如何に（Wie）描かれているかということへという具合に関心が像客観へと自覚的に向かう。つまり、この箇所では、模像機能が支配的な非的美像意識と美的像意識との間の関心方向の違いが指摘されている [= 読解 A]。しかし、文脈に即してこのように読解する場合、幾つかの疑問が生じる。

一つには、引用中の「絶えず一還る」という表現は、自由な意志に基づく活動にはそぐわないのではないかという疑問である。（引用中の「内的にかかっている」の「内的」についても同様。）二つには、上のような理解では、美的像観照における関心と享受との関係がはっきりしないという疑問である。後者（関心と享受との関係）の疑問については、次のように補うことで、一応説明がつく。享受という事態は、ごく自然に考えれば、ある種の意識の集中、すなわち、前節において検討した作用に没頭する遂行様態としての注意の規定に相当するような事態である。つまり、美的観照においてわれわれは観照作用に没頭するという一種の遂行様態にあり、この没頭は思念としての注意と同じような自発的作用となる。こうした状態において、関心が（像）主題にではなく像客観にかえるのは、観照者が、絶えず関心を、例えば、絵画面の構成や構成と連動する色彩の配分に向けて研ぎ澄ませて、自由に眼差しを向けかえることによる、という具合である。このように補足すれば、関心と享受との関係に一応の説明がつく。それでも依然として最初の疑問は解消できない。関心の眼差しの自由な向けかえの保障は、いわば美的経験の前提であっても、関心をどこへ向けるかは完全に観照者の自由に任されているというわけではない。少なくとも、上のフッサールの引用の「関心は絶えず像客観へ還る」という記述には、観照者の自由意志による、関心の像客観への任意の帰還というニュアンスはない。「絶えず一還る」という言い回しは、意志の力で戻るこ

とについて、あるいは、反復の努力をすることについて語る言葉ではない。

そこで、「絶えず一還る」の語感を尊重するために、『注意講義』における「関心」概念を、上の引用にあてはめることにする [= 読解B]。(上の引用箇所と『注意講義』とが同一の講義に属するということを想起されたい。)『注意講義』における関心概念は、比較的高次の認識作用としての注意作用 (= 思念) ではなく、思念の発動を促すモーター、発動機を意味するものであった。従って、この記述における関心は、美的に気に入る作用 (das *aesthetische Gefallen*) のように表象作用によって基づけられた作用、総合ではなく、基づける表象自体を成立させる契機、誘引ということになる。これは、美的像観照 (= 美的像意識) における、諸対象 (単一かつ端的な感性的事物知覚の場合とは異なり、対象性は三つである) に統一性を与える働きとしての思念の基礎となる感情、心的状態である。このように読解 (= 読解B) することで、一つ目の疑問には対応できるようになる。この記述は、関心という習慣的傾向性によって精神的な眼差しが導かれる事態全体を表すものとなるからである。こうすることで関心が像客観に「自由に戻ることができる」ではなく、「絶えず一戻る」と言い切ったフッサールの真意を汲むことができる。関心が像客観に「内的にかかっている」ということについても同様である。『注意講義』において関心は習慣的傾向性であった。傾向性である以上、関心の向けかえは主観の自発的能動性に全面的に任せられているのではない。色や形態の独特の調子が、すなわち、像客観現出の仕方 (Wie) が、自我 (の関心) を触発するという意味で、関心は像客観と「内的に」結びつくというかたちで整合的に読解可能となる。しかし、このようにフッサールの言葉のニュアンスを最大限に汲み取る方向で読解すると、今度は逆に、美的経験と関心との関係が不透明になってしまう。「美的享受、例えば、絵画鑑賞 (観照) とは、やはり、最初の読解が示したような、もっと自由な主体的態度によるものではないのか。」という疑念が頭をもたげてくるのである。上のように、『注意講義』の関心概念を引用箇所にあてはめて、関心を、低い意識次元の契機、すなわち、明確に意識に上らないおぼろげな兆し、気分的情動として捉え直せば、確かに、絵画を眺める際に、時として、自分の意志に逆らうかのように、構図や色調の方へ眼差しが惹きつけられることがあるという経験的事実に適うという点で納得がいく。けれども、この読解 (= 読解B) は、美的経験と芸術的経験に共通する自由な自発性を無視しているという点で、美的関心と享受との関係把握において、先の解釈Aとはいわば逆の意味で一面的にすぎはしないかという疑いが払拭できないのである。

実は、上に示した二つの読解 (読解A, 読解B) は、いずれも像意識という統一的な意識において関心の統一性は保持されているとする前提に立っている。この前提を採らず、次のような仕方に関心を複層的なものと考えることによって、二者択一ではなく、両読解の統合を図ることができると思われる。なお、以下に示す統合の道筋は、本稿の冒頭に記した、像の発生的現象学における文脈移動の道筋に他ならない。

上のフッサールの記述を、「思念の」としての感情状態 (関心) と、「自覚的な高次の能動的な作用としての関心」 (狭義の美的関心) とが、意識層を成しつつ、共に生起している場面の記述として理解する。美的観照が、絶えず「像客観に還る」ということに関して、このような関心の方向性は、訓練の結果、獲得される美的習慣であり、沈殿化した関心である。この関心は、普段は意識されないが、美的経験において、その都度、触発され、呼び起こされる。しかし他方、この関心は、それが美的観照、美的経験と呼びうる資格のものである限り、その発動に際して、単なる受身の状態に留まるといふことはあり得ない。芸術的経験という意味での美的経験には、覚醒状態にある自由な自発的関心が欠かせない。これは、思念としての関心のような理論的関心ではないが、それと同じ次元における、一種の、際立たせ機能をもつ美的関心である。

このように解釈することにより、像意識における、像意識とリズムとの関係—とりわけ相克現象とリズムとの関係を考察する道筋が見えてくる。像意識とリズムとの関係はどのようになっているのだろうか。

像意識とリズムとの関係を具体的に考えるために、ここでいったん、『注意講義』の考察主題であった知覚の話に戻る。事物知覚における関心のリズムとは具体的にどのような事態をさすのだろうか。「緊張 (志向) と弛緩 (充実) のリズム」とは、認識プロセスの骨格である志向とその充実化を、主観の状態性の次元において捉え直したものであった。このことから、調和的に進行する同一の知覚連関において、それが同一の知覚 (樹木の知覚) と呼びうるものである限りにおいて、関心のリズムも一つであるということができる。関心の統一性が対象の同一性を基づけている。事物知覚の場合、調和的に進行する同一の統一的な知覚作用においてそれが連関性格をもつからといって基本的に対象の分裂は生じない。

これに対して、像意識の場合は、知覚とは異なり、三つの対象性区分はその本質固有性に属する。像意識の場合、統一的な一つの像意識であっても対象性が三つに区分している以上、志向と充実のリズムは複数的ということになる。志向（緊張）とその充実化（弛緩）という認識プロセスのセットが、像意識においては、物理的像へ向かう緊張と弛緩の関心のリズムと、像客観へ向かう緊張と弛緩のリズムと、像主題へ向かう緊張と弛緩のリズムとして、三種のリズムがせめぎ合いつつ交織する。換言すれば、一方で、カンヴァスを亜麻布とその上に載った絵の具（物理的像）として志向する。（この充実化は「これは亜麻布である」「絵の具である」と表現できる。）像意識の場合、この認識過程には、これに本来的に染色された（49）別種の充実化の過程が重なる。（この充実化の過程には「これはりんごの像である」「これは描かれたりんごの表面の色である」という表現が対応する。）この重なりを詳しく見るとこうである。物理的像への関心が、関心の集中というかたちで意識の緊張状態が生じる。この緊張状態が「これは絵の具である」というかたちで満たされると弛緩が訪れる。この緊張と弛緩の運動（往復）はそれだけで単独に生起するものではなく、絶えず、像客観への志向とその充実という別の関心、往復運動に曝され、脅かされている。像客観への関心は像主題への関心と切り離すことができない。関心は引き裂かれつつ、交代しながら、満たされ変転する。関心のリズムは複層的、あるいは、多声的に進行する。

像意識の基本的構造である諸統握の相互浸透と相克を、上に輪郭線を示したようなかたちで、意識の低い層における感情契機としての関心のリズムの交わりとして把握することにより、像意識のもつ通常の知覚とは異なる経験の様相を身体意識の次元で現象学的に理解するための用意が整う。リズムは自然の息吹、ものからの働きかけに密接に結びつくものであるが、働きかけそのものを意味するのではない。リズムは、自然の側からの働きかけへの身体呼応である。リズムとは、内的運動感覚あるいは自己触発に近いもの、キネステーゼの能力とも連なるものだからである。

本節の考察の手掛かりとなったフッサールの記述に戻って、美的関心と享受との関係を上述のような、リズムの交織と結びつけることが許されるとしたら、美的関心の自発性とは、このような複雑なリズムと必然的にこれに伴う緊張の増幅を自覚的に選び取ることを意味するのであろう。重複と中断を繰り返すリズムによって選ばれることを自ら選択する。像意識の基本的構造の中核をなす像客観をめぐる「二重の意味における一つの相克」とは、このような複数的なリズム間の競合によって、導かれ、身体的に感じ取られている。こうした複雑なリズムに自発的に乗せられるという点に日常的経験とは異なる美的享受を見いだすこと、こうしたことを、実はフッサールは、「像化の仕方に享受を見いだしつつ、関心は像客観に内的にかかっている」という言葉でもって、言いたかったのではないだろうか。

像意識とリズムとの関係は、なぜ、画面の構成と色彩の問題を重視する現代の画家が、依然としてもものを見るという経験を重視することを止めないのかということについても、これを写実性への信仰の残滓とする見方とは、別の見方に通じている。この見方とは、事物を配することで生命感を与えてくれるという信頼感に基づく発想である。この生命感とは、もちろん、単に自然がそこに再現されていることに由来するものではなく、像意識における対象性の分裂、相克現象がリズムとなって画面に力を与えてくれるということである。これが、本稿の考えるカンディンスキーとは別の行き方である⁽⁸⁾。

註

凡例 本稿ではフッサール全集からの引用は、巻数、頁数にて記す。但し第38巻からの引用は、頁数のみ記す。

- (1) Husserliana Band XXXVIII, Edmund Husserel, *Wahrnehmung und Aufmerksamkeit Texte aus dem Nachlass (1893-1912)* hrsg. von T.Vonger u.R.Givliani.
- (2) Husserliana Band XVI *Ding und Raum Vorlesungen 1907*. 『物と空間』講義については、伊集院令子「物と空間—発生的現象学的観点から」中部哲学会編『中部哲学会年報』第37号68-78頁参照。
- (3) 伊集院令子著『像と平面構成 I—フッサール像意識分析の未開の新地—』（見洋書房2001年）参照。
- (4) 主題から逸れる恐れがあるため、本稿は『算術の哲学』や『イデー I』第119節以下の諸考察におけるような、集合作用的な意味での総合に関わる部分の検討には立ち入れなかった。このため、上の議論の流れの整理においてもこうした部分は割愛した。
- (5) 東京大学の榊原哲也先生より、「思念と関心との関係、とりわけ「関心」については、Hua VIII 第42講義に詳しい規定があることをご指摘頂いた。そこでこの関心概念の規定（特に同講義中の、102ff. における規定）を、本稿の内容に活かすためには、さらに、時間

軸を加えた同一の作用体験における全体／部分諸作用の関係という観点から本格的に論じる必要があると思われる。このため、榊原先生の貴重なご教示については、筆者の今後の研究課題とさせていただくこととした。榊原先生には、この他にも有益なご指摘を頂きましたことを、この場をお借りしてお礼申し上げます。

- (6) この制約は、受動的志向性などによる志向性理論の拡張によって乗り越えられるとされている。フッサールの自己規制、および、発生的現象学と静態的現象学（記述的現象学）との関係は、上掲論文伊集院「物と空間—発生的現象学的観点から」を参照。
- (7) 上掲、伊集院『像と平面構成Ⅰ』第一章。
- (8) カンディンスキーを現象学的試みとして理解する解釈に関しては、伊集院令子「フッサール、カンディンスキー、アンリ——フッサール像意識理論の一局面をめぐるH. R. ゼップ氏との討議」（お茶の水女子大学大学院人間文化研究科年報『人間文化研究年報』第26号10-17頁）。

(2005年12月1日受理)